



高校生のための 探究学習事例集

キャリアをつなぐ高大連携



東京都立高等学校探究学習事例 —— 東京都立山崎高等学校（普通科）
東京都立若葉総合高等学校（総合学科）
東京都立第五商業高等学校（ビジネス科）
地域連携や探究活動、ビジネス教育に
取り組む高校の先生方にお話を伺いました。

2024 年度「多摩大学教育内容 & 探究学習事例勉強会」開催報告

多摩大学の高大連携

JEES・住友金属鉱山地域貢献奨学金

東京都立山崎高等学校

所在地：東京都町田市
 創立：1982年
 設置学科：普通科

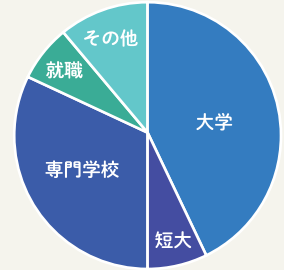
—2023年度—

生徒数
 男子 309名 / 女子 249名

進路情報（卒業生数 173名）
 大学：75名 / 短大：12名
 専門学校：72名 / 就職：11名
 その他：20名



【左】ユネスコスクールとしての教科外活動「GreenDay」。地域と協力して環境整備を行っている【右上】2学年の探究発表・討論会の場となる「山崎サミット」は生徒が1人1役を担い上げ【右下】山崎高校の阪田紫帆里主任教諭。ユネスコスクール加盟当初より国際交流や探究学習のやり方を試行錯誤してきた



探究学習の過程

1年

人間と社会

「グローバルな視点」でユネスコスクール加盟校と交流し、国際デーを取り入れた環境（緑、資源、エネルギー）問題について探究する。

2年

総合的な探究の時間

グローバルな視点を活かし地元である「山崎町」「町田市」に焦点を当て、グループでのフィールドワークを軸に地域課題解決を探究。12月に「山崎サミット」を開催し探究結果を議論する。

3年

総合的な探究の時間

1・2学年での探究テーマをもとに、地域の未来と個人の進路実現に向けた探究を深める。2024年度は進路行事としてユネスコスクール関東ブロック大会に参加し、代表生徒の発表を実施した。

グローバルな視点と地域との協働で地域課題を掘り下げる

2022年11月にユネスコスクール（ASPnet (Associated Schools Network)）となった山崎高校。持続可能な開発のための教育（ESD）推進拠点として、海外の加盟校との交流などによる国際理解教育に取り組んでいます。「総合的な探究の時間」では、地域の外部探究支援員とともに地域課題の解決を探究し、フィールドワークや討論などを通して、変化化する社会に柔軟に対応する力を養います。

学校教育目標の一つとなった「ユネスコスクール」

山崎高校の国際交流の取り組みは、2022年のロシアのユネスコスクールとの交流から始まりました。ニュースで見る戦争の光景と、オンライン交流で知るロシアの平穏な学校生活とのギャップに、生徒はとても驚いたといいます。同校進路指導部で探究学習を統括する阪田紫帆里主任教諭は、ユネスコスクール加盟校としての学びを次のように話しました。

「国際交流については、**単発の試みではなく継続的な交流**にしたいという思いがありました。ロシアの学校との交流は、返信が来るかどうか分からない状況で、1年生の生徒たちが手紙を出したところから始まり、オンラインで顔を合わせて交流するところまで持っていくことができました。想像できないほど不安定な社会情勢の国で、自分と同じような子どもたちが日常を送っている。それは実際に交流を体験しなければ分からなかったことです。その取り組みを経て、現在はロシアのほかにもイギリスや台湾とも国際交流を続けています」

地元・山崎町とつくる持続可能な学びの場

同校では3年間のキャリア教育の中で、1学年「人間と社会」ではユネスコスクール活動でグローバルな視点を学び、2学年からは地元・山崎町に視点をしぼり、地域課題解決を目指した「総合的な探究の時間」に取り組めます。総合的な探究の時間は12名ほどのグループに分かれ、地元である**町田市山崎町や学校に隣接する山崎団地の課題解決**を、フィールドワーク

を軸に考えます。カリキュラムの大きな特徴は、1年間で探究学習のサイクルを2周回すること、そして地域の外部探究支援員の存在です。生徒は教員や外部探究支援員と議論を重ねながら7月までの1サイクル目の探究学習を経て、12月の最終発表に向けて2サイクル目の探究を深めていきます。町田青年会議所や山崎団地自治会などは外部探究支援員として、生徒が**地域の課題を“自分ごと”として捉え取り組む**ために、生徒や教員と地域をつなぎ、課題の設定から情報収集、分析やアウトプットなど、探究の過程の全てに伴走します。定期的に開かれるコンソーシアム会議では、生徒、外部探究支援員、教員それぞれが、総合的な探究の時間のあり方や地域課題を考え、持続可能な学びを模索し続けてきました。この**協働体制の構築**は、教員の異動に関わらず生徒を主体に地域とつながり学びの場を持続可能に継続させていく大きな基盤となっています。

生徒の進路決定に結びつく「総合的な探究の時間」と生徒委員会活動

2学年の集大成となる12月の「山崎サミット」では、探究の成果に対し外部探究支援員や教員などからフィードバックを受け、3学年では、進路選択を見据えた探究テーマからの社会へのつながりへと意識を向けて探究活動を実施します。こうした過程の全てが生徒の進路実現につながっていくと阪田主任教諭は考えています。（※）

「ユネスコスクールにおける教科外活動や総合的な探究の時間を通して、生徒は課題の見つけ方や向き合い方、討論の練習や目標達成までのプロセス、さらに社会と接する上で必要な身だしなみなど、さまざまな力を培っていきます。我が校の卒業生の進路決定は推薦によるものが多く、ユネスコスクールにおける教科外活動『生徒委員会』（全生徒による参加）や探究活動の取り組みが、推薦入試に活かされるケースはとても増えています」国際交流で育まれたグローバルな視点と、外部探究支援員との連携で得た地域への意識や課題を探究する力が、進路に対する生徒の視野を広げ、目標達成への自信となっているようです。

（※2025年1月現在、国公立大学2名を含む157名の生徒の進路が決定しています）

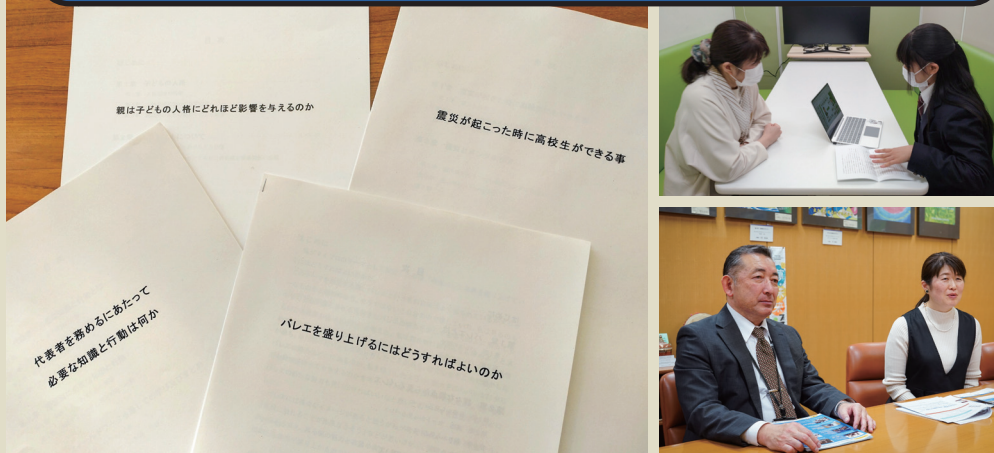
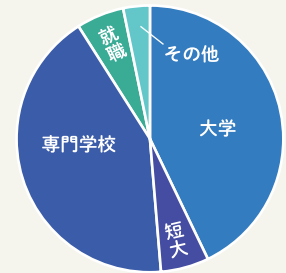
東京都立若葉総合高等学校

所在地：東京都稲城市
 創立：2005年
 設置学科：総合学科

—2023年度—

生徒数
 男子 217名 / 女子 445名

進路情報（卒業生数 209名）
 大学：98名 / 短大：13名
 専門学校：78名
 就職：13名 / その他：7名



【左】2024年度の3年生の探究テーマ。それぞれの興味関心が入り口となり、探究を深める過程で進路や社会への意識が芽生えていく【右上】探究活動に対する個別指導。1人の教員が12～14人ほどの生徒を担当する【右下】時代に合わせた探究学習のあり方を考える、若葉総合高校 山室俊浩校長（左）とキャリア教育部の赤澤愛教諭（右）

探究学習の過程

1年

産業社会と人間

自己理解を深め協働学習の姿勢を身につける、職業を中心とした社会への理解を深める、などの学習を通し、1年かけて自分の進路を考え「マイライフプラン」として発表する。

2年

3年

マイプロジェクトⅠ・Ⅱ

開校以来 20年間指導してきた「探究活動」の授業。興味・関心・進路などから個人で独自のテーマを設定し、調査・探究活動を行う。探究サイクルは2年を通し1回だったが、2024年度から2回となった。担当教員や下級生からのフィードバックを受け、より探究し、社会で活かせる力を養う。

3年かけてプロセスを学び個性を伸ばす探究活動

生徒が多様な選択科目の中から、自らの興味関心や進路希望に合わせた「自分だけの時間割」で学び、進路実現に向け能力を伸ばす若葉総合高校。1年次にはキャリア教育の基礎的な役割を担う「産業社会と人間」で自己理解を深め、2・3年次の総合的な探究の時間「マイプロジェクトⅠ・Ⅱ」で自ら課題を見つけ探究活動に取り組みます。

れないということも出てきます。本校では探究学習の授業づくりに特化したキャリア教育部を立ち上げ、週ごとに指導案をつくり、毎週担当教員と打ち合わせをするようにしています」と山室校長。

総合高校の教育活動の軸となるキャリア教育

「最後の結論に至らなくても、探究のプロセスを回せたという経験があることが重要」。キャリア教育がベースにある若葉総合高校で創立から20年間続いてきた「マイプロジェクト」について、山室俊浩校長はこう話しました。同校の生徒は3年間を通して、授業の中で将来に向き合う時間を持ちます。1年次の「産業社会と人間」は週に2コマ。働くことや職業について考え、自らの職業観を育みます。2・3年次の「マイプロジェクトⅠ・Ⅱ」では進路実現につながるテーマを設定し、探究活動を通して興味関心領域への理解を深め、論文やプレゼンの能力を高めます。この過程こそが生徒たちの成長につながり、10年後の将来を見据えたキャリア設計の力となると山室校長は考えます。

生徒にも教員にもフィットする持続可能な学びのあり方

キャリア教育部では、主任の赤澤愛教諭を中心に、各学年の担当教員から個々の生徒の進捗状況や指導案へのフィードバックを受け、探究学習のカリキュラムを柔軟に変更していきました。2024年度は、それまで2年次後半から3年次後半まで時間をかけて進めていた探究学習の1サイクルを、2年次のうちに1周させ、3年1学期中にさらに1周させるよう授業構成を変更し、現在挑戦中です。これにより進路選択にあたり、探究学習の成果物を活かし入試に臨む生徒も現れました。

より良い学びの場のための組織改革

総合高校の強みでもある、生徒一人一人の個性に合った進路実現のための学びのあり方をさらに追求すべく、同校では課題解消のための組織改革を行っていました。

また成果発表や提出形式についても、これまで論文形式でまとめた探究成果をまずポスター形式でまとめ、下級生からのフィードバックを経て、最終的にはPowerPointのプレゼン形式に落とし込むことをゴールとするなど、生徒の力が十分に発揮されるよう、教員同士で意見を交わしながら軌道修正しています。探究学習の指導と教員との連携について、赤澤教諭は次のように話しました。

「毎年1月に3年生が学習成果を発表しますが、以前に比べて興味関心という入口から深掘りができていないケースが増えてきました。そこには生徒側の課題だけでなく、教員のキャパオーバーという課題もあります。総合高校はもともとキャリア教育をベースにしてきているはずですが、教員の異動などでそれまで培ったものがうまく引き継が

「私たちはキャリア教育部で探究学習自体について理解し指導案を考えますが、探究活動を担当している教員は、実際の生徒の様子を把握し鮮度の高い意見を届けてくれます。教員同士もフィードバックし合いながら、生徒たちに適したレベル設定をしベストなやり方をみんなで作っていかればと思っています」

今後は地元である稲城市や近隣の産業と連携した探究活動も視野に入れている同校。2026年度に向けて教育課程の改革を検討するなど、未来につながる学びのあり方を更新し続けています。

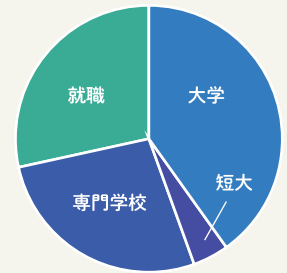
東京都立第五商業高等学校

所在地：東京都国立市
 創立：1941年
 設置学科：ビジネス科

—2023年度—

生徒数
 男子 214名 / 女子 408名

進路情報（卒業生数 204名）
 大学：82名 / 短大：9名
 専門学校：55名 / 就職：58名



【左】2019年度の2学年「ビジネスプラン発表会」。一橋大学の鷲田祐一教授と学生とともに企画し、6チーム同時進行で合計36チームが発表した【右上】進路指導主任の岡本玲教諭。教員の専門性を活かしながら探究学習全般を統括する【右下】連携する大学生による「ビジネスアイデア」の授業

探究学習の過程

1年

東京のビジネス

地域の産業や企業、地域を構成する経済圏などを調べ発表する。

2年

ビジネスアイデア

週に3コマを使い起業の基礎知識を学び、課題発見とその解決をビジネスアイデアに落とし込み、1回目のビジネスプランコンテストへ挑戦。地域のビジネスパーソンや活動者の実体験から学び、再度ビジネスコンテストへエントリーする。

3年

課題研究

1・2学年での学びを活かし、進路希望や興味・関心により、さらに探究を深める。週3コマが割り当てられている。

ビジネスへの理解を深め将来への想像力を豊かに

2018年度に設置学科を「商業科」から「ビジネス科」へと学科改編した第五商業高校では、専門科目の授業を通じた資格取得に加え、アクティブラーニングで主体性を育みビジネスへの理解を深め、社会で活躍する人材の育成に力を注いでいます。同校の探究学習は1学年の「東京のビジネス」、2学年の「ビジネスアイデア」を経て、3学年の「課題研究」に帰結します。

基本を学び、より実践的な探究サイクルを身につける

学科改編により新たに創設された科目「東京のビジネス」。1学年の生徒は地域の産業、企業について調べ、地域社会がどのような経済圏で成り立っているのかを学びます。続く2学年では同じく新設された週に3コマの「ビジネスアイデア」の授業で、マーケティングの思考に基づきグループでビジネスを考えます。どちらの授業にも、企業人や大学教員、学生、地域活動をする市民などが講義に訪れる機会があり、生徒は地域の経済活動への理解を深めていきます。「ビジネスアイデア」の特徴は、高校生向けのビジネスプランコンテストへの応募です。もともと3学年の課題研究に組み込んでいたものを、学科改編に伴うカリキュラム変更に併せ、2学年前半と後半の、2回の挑戦に切り替えました。2学年の生徒はまずビジネスや起業における考え方や専門知識を学び、題材となるストーリーから課題を見つけ、解決のためのアイデアを考えるプロセスを身につけます。3学年の「課題研究」は20名ほどのゼミ形式となり、それまでの学びの流れを汲みながらそれぞれのテーマを深め、進路選択へとつなげていきます。

質の高い探究的な学びを維持する地域との連携

ビジネスという商業高校ならではの専門性を生かした探究学習を行ってきた第五商業高校。そのプロセスやコンテンツが充実度を増す一方で、

指導する教員への負荷も高くなっていきます。進路指導主任の岡本玲教諭は、地域の大学の教授や学生、地元企業や公的機関、NPO法人などと連携し探究学習の充実を図る同校の工夫について話しました。「2年生の『ビジネスアイデア』は共通のゴールを設定し、役立ちそうな教材は教員間で共有しますが、導き方は担当教員の裁量に任せています。結果的にクラスごとのゴールまでのプロセスは異なり、過程での進捗や習熟度にばらつきが出るので、外部との連携により共通の学びの時間を設けています」

基礎を身につけ社会人と関わりイメージする将来の姿

同校では2015年から、一橋大学の学生を中心に運営されるNPO法人くにたち富士見台人間環境キーステーションと連携し、マーケティングの授業を進めてきました。「ビジネスアイデア」では、大学生が地域課題に紐づいたテーマを提案し、生徒が学生とディスカッションしながら、アイデアをブラッシュアップしていきました。2学年最初のビジネスプランコンテストの応募にあたっては、日本政策金融公庫の職員が、ビジネスの基本や起業について専門知識を講義します。さらに国立法人会と立川法人会から若手起業家をゲストに迎え、毎週様々な起業や社会貢献について話を聞く時間をつくりました。すでにビジネスプランコンテストを経験し、基本的なビジネスの知識やイメージを持つ2年生は、講義内容をしっかり理解しながら聞くことができるといいます。「探究学習を通じた進路選択と同時に、本当に多様な視点で社会の中で生きる大人たちと出会うことで、進路のさらに先にある人生にも想像が及ぶのではないかと期待しています。基本を学ぶことと大人たちのリアルな話を聞くことが、ビジネスプランや将来を考えるために必要な両輪の学びになると考えています」

2024年度開催

「多摩大学 教育内容・入試説明& 探究学習事例勉強会」

登壇校のその後

2024年5月10日に初めて開催された「多摩大学教育内容・入試説明&探究学習事例勉強会」では、探究学習事例勉強会の時間は東京都立秋留台高校・五日市高校・町田総合高校の先生に、各校での取り組みについて発表していただきました。高校と自治体・企業・大学との連携を深め、生徒の探究心をどう引き出すか。情報交換をしながら学びの可能性を広げる機会となった勉強会での気づきや変化を、登壇した3校に聞きました。

第2回目となる「多摩探究学習研究会」は、2025年2月6日に開催いたしました。

東京都立秋留台高等学校

一勉強会での気づきやその後の具体的なアクション、探究学習の変化について

他校の取り組みを伺い、本校の総合的な探究の時間には3年間を見通したプログラムがないこと、体験活動が少ないことが課題だと感じた。本校では1年次に企業探究を実施しているが、企業の方に一度学校にお越しいただくのみで作業もすべて校内で完結している。他校では実際に企業に行ったり、企業の方と作業をしたり、地域の方と触れ合ったり、地元へ貢献したりするなど活動の幅が広く、学習内容が充実していた。3年間の探究の時間につながりができるように今後方策を考えていきたい。

一2025年度「総合的な探究学習の時間」の計画

- 1学年：適性検査、企業探究、系統別体験授業 ※1・2学年は進路校外学習も実施予定
- 2学年：適性検査、インターンシップ、インターンシップ先の企業探究、自己分析、自己PR研究
- 3学年：進路系統別ガイダンス、自己分析、PCでの資料作成



企業の方へインタビューを行う企業探究の時間

東京都立五日市高等学校

一勉強会での気づきやその後の具体的なアクション、探究学習の変化について

勉強会を通して、探究学習と進路指導を連携させていくことの重要性を改めて実感した。地域資源を活用したフィールドワークを充実させたほか、キャリアを意識して1年生全員に夏休みインターンシップの実施、2年生には公務員や地元優良企業の方による職業講話や仕事体験の機会を設けた。また体験を通して感じた思いや自身の変容を言語化する機会を増やした。多摩大学の学生による探究学習支援や中小企業ガイダンスの実施、大学主催の[高大連携]教職員会社見学会に参加し、教員の進路指導スキルアップも図ることができた。

一2025年度「総合的な探究の時間」の計画

- 1年次：「知る・広げる」をテーマに多様な体験活動・講話・ワークショップ等を通して、様々な進路選択の可能性を考える
- 2年次：「深める」をテーマに、地域の方と協働した課題解決プロジェクトを実践 自身の強みを見つけ、進路希望を明確にする
- 3年次：「かなえる・還元する」をテーマに、進路活動を行い、想いを伝える練習を積み重ねる 3年間の探究活動の成果を卒業論文や探究成果発表の場で発信する



生徒がつくるイベントで地域の飲食店と連携し、廃棄されてしまう食材を活用した「すいとん」を地域の方にふるまった

東京都立町田総合高等学校

一勉強会での気づきやその後の具体的なアクション、探究学習の変化について

勉強会を通して、各学校は「学校の実態」に合わせて「探究学習」を教育活動に組み込んでいることを知り、本校の「探究学習」を改良するためには「総合学科の特色」、「地域や生徒の実態」などを考慮し、地域の方々と共に教育活動を考えていくことが大切だと確信した。本校は「地域連携」や「高大連携」の仕組みが構築されている。その上で最善の教育活動を目指すため、来年度から地域のNPOに地域の教育資源の発掘から連携までの業務にも携わっていただき、地域や生徒の思いを教育活動に反映できる仕組みを構築したい。

一2025年度「産業社会と人間（1年次）」「人間と社会（2年次）」「探究（2年次）」「探究（3年次）」の計画

- 1. 町田市探究（地域連携：12か所の協力団体※）：産業社会と人間（1年次：2・3学期）
- 2. 夏の体験活動（地域連携：10か所の協力団体※）：人間と社会（2年次：夏季休業）
- 3. IBL Day（高大連携：8か所の協力大学※）：探究（2年次：2学期）
- 4. 課題研究（協力先：各自）：探究（2年次：3学期、3年次：1～3学期）

※令和6年度の協力団体の数です。年度によって協力団体の数が異なります。



2年次の夏の体験活動（富澤商店・多摩大学）「富沢商店」と多摩大学「ながしまぜみ」の協力により「富澤商店の材料と地域の食品を使ってパン作りをしよう」を実施。多摩大学は1年次の町田市探究や2年次のIBL Dayにも協力している

地域と教育をつなぐ

多摩大学の高大連携の取り組み

多摩大学では、高校生の成長や進路選択を支援するため、大学生による探究学習授業のサポート、産業界と連携したキャリア学習支援、模擬授業などを通じて、高校教育と地域社会を結びつける実践的な取り組みを展開しています。本学の教育の特色を活かし、高校と連携して地域社会が抱える課題を発見し、解決に向けたアプローチを共創することで、生徒の学びを深化させるとともに、社会的な実践力の向上を図り、地域課題解決への貢献を目指しています。

多摩大学連携協定締結高校（2025年1月現在）

東京都立秋留台高等学校 / 東京都立五日市高等学校 / 東京都立永山高等学校 / 東京都立羽村高等学校 / 神奈川県立上矢部高等学校 / 神奈川県立藤沢清流高等学校 / 私立城南静岡高等学校 / 私立藤沢翔陵高等学校 / 私立三浦学苑高等学校 / 私立横浜隼人高等学校

高校の授業支援

大学生による 探究学習の 授業支援



地域の課題解決をテーマにした高校の探究学習授業に、大学生が協力しています。高校生が行う企業などへの調査活動に対し、情報収集や分析をサポート。PowerPointを活用した資料作成の支援や学習の進行に役立つアドバイスも提供します。

出前授業



大学の研究や授業内容、地域企業などについて高校生に分かりやすく伝え、新しい視点や発見を得てもらうことを目指し、地域や社会の課題について一緒に考えます。高校生がもっと知りたい、挑戦してみたいと思えるような楽しい学びの場を提供しています。

企業による授業支援 (企業を招いた授業)

大学が授業設計、調整のサポートを行い、高校生の興味関心にあったテーマ設定と企業とのマッチングを実現することで、効果的な学びの場を提供。大学の持つ「つなぐ力」で、未来を担う高校生と地域社会をつなぐ役割を果たします。



高校生の大学見学会やインターンシップ

大学見学会



高校生が大学での学びを具体的に思い描けるよう、模擬授業やキャンパスツアーなどで大学生活の一端を体験してもらう取り組み。大学生と共に地域課題の解決に向けた企画提案を行う授業では、主体的な学びのプロセスを体験することができます。

インターンシップ 受け入れ



高校生に大学という職場で働く楽しさを発見してもらい、大学の役割や情報発信の必要性を理解する機会を提供しています。企業や地域コミュニティとの協働企画に触れ、社会人の作法や職場の雰囲気を感じてもらいます。

高校教員のための企業研究会

探究授業に関する研究会



地域連携の専門教員が、高校教員向けに企業の実態や地域産業の現状を分かりやすく解説し、企業理解を深める講座を実施しています。高校生へのキャリア教育や進路指導に役立つ最新の情報を提供し、地域の教育力の向上につなげます。

教職員会社見学会



大学のハブ機能を活かし、優良企業と教育機関の連携を目的に、高校教員や大学教職員が企業を見学。企業のニーズや地域産業の現状を学び、地域の課題解決への知見を共有し、教育・研究活動への具体的なフィードバックを得ることを目指します。

地域で学び育まれる
多摩大生の実践力

「地域連携活動」の ゼミ研究の一部を紹介します！

石川ゼミ

マチカドこども大学[®]で小学生に「国際文化学」の講座を行う学生



石川ゼミ

マチカドこども大学[®]「国際文化学」「英語学」
(小田急不動産株式会社)

—ゼミの活動内容

小田急不動産と多摩大学の連携により 2022 年から開始された「マチカドこども大学[®]」で、英語や国際文化をテーマにした小学生向けの講座を担当。学生たちが主体となり講座内容を考え、一貫して運営を行っています。クイズやゲームを取り入れたり、ワークショップ形式を採用して子どもたちの思考を刺激し、楽しく深い学びを得られるよう工夫しています。こうした実践的な活動は、学生たちにとって、自分と異なる視点から物事を考える重要性や、実社会に必要な企画力、計画力、協働力を養う貴重な機会となっています。また、地域と連携した取り組みを通じて、コミュニティの一員としての意識を深め、協力しながら成長しています。

—ゼミ生の声

子どもたちも保護者の方々も、とても真剣に取り組んでくださり、みんな楽しんでいました。私自身も多くのことを得ることができました！（交換留学生 マンギョクジ）／児童の目線に立って考えることや、計画性、コミュニケーション力など様々なことが身につくと感じた。（2年 大山万喜）／自分達で考えて準備をして形にしていたので自信がついたと感じた。（4年 森久保美穂）

ながしまゼミ

タマリズムプロジェクト事務局会議の進行役を務める学生



出原ゼミ

星空体験の参加者にゼミで制作した VR ゴーグルの説明を行う学生



ながしまゼミ

観光まちづくりコンテストの企画・運営
(多摩市・稲城市・八王子市・日野市・町田市・京王観光)

—ゼミの活動内容

観光まちづくりをテーマにした「タマリズムプロジェクト」を立ち上げ、大学生に企画を応募してもらい、企業や自治体と連携しながら実用化を目指す活動を 4 年間運営してきました。課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現という探究サイクルを繰り返しながら、自治体や企業の方々との関わりを通じて学生たちは顕著に成長しました。

—ゼミ生の声

今年度のプロジェクトリーダーとして、企画立案から運営までを統括しました。特に苦労したのは、自治体・企業・学生という異なる立場の関係者間の調整です。各々の意向を汲み取りながら企画をまとめ、困難を乗り越えてプロジェクトが成功した時の達成感は、大きな自信につながりました。（3年 永井誠十）／コンテスト会場に足を踏み入れ、その広さに驚きましたが、それ以上にこのプロジェクトの責任の大きさを痛感しています。これまでの課題の整理・分析を行い、コンテストをさらに魅力あるものにしていきます。とても不安ですが、期待も大きいです。（2年 野田一斗）

出原ゼミ

三鷹市の夜空の夏の大三角をVRで星空体験
(はてなアカデミー)

—ゼミの活動内容

バーチャルリアリティを中心に、高度な技術開発力と徹底した体験者視点とを活かして、「誰でも」「自然に」楽しめるシステムやコンテンツを開発しています。2023 年から、三鷹市を中心に「親子のための体験型 STEAM 教育」の活動をしている「はてなアカデミー」に展示協力を始めました。展示では独自開発した VR コンテンツ制作システムを使い、体験当日の夜の三鷹の星空を再現し、「夏の大三角」などの見つけ方を学びました。また新潟県立科学館での企画展示、岡山県井原市との星空体験 VR の共同制作など、広く活動しています。

—ゼミ生の声

三鷹の展示では、VR ゴーグルで月や土星、代表的な星座を子供たちと親御さんに観測してもらいました。ゼミで制作したシステムは、難しい操作を覚える必要がありません。また、コンテンツの作成も、月や恒星の場所を指定するだけの簡単操作です。楽しそうに体験していただいて、心の底からうれしかったです。（4年 川越翼）

多摩大学で学ぶ「総合的な探究の時間の指導法」

多摩大学では、経営情報学部で高等学校「情報科」、グローバルスタディーズ学部で中学校・高等学校の「英語科」の教員を養成する教職課程があり、それぞれ各学年10名程の学生が教員免許取得に向け、日々学んでいます。経営情報学部では、「経営」と「情報」を学びながら教員免許を取得することができ、社会で必要とされる「情報」を「経営」の視点から活用することを学べるわけです。教員免許といえど教育学部がまず思い浮かびますが、これは、教育学部にはない多摩大学の強みです。

教職課程には、「総合的な探究の時間の指導法」という科目があります。学生は探究課題の設定の仕方や活動における指導方法、評価方法等を学び、自分で学習指導案を構想し、作成できるようにします。学習指導要領において、「総合的な探究の時間（以下、探究）」の目標や内容は各学校で設定することになっており、各学校は地域の状況等を踏まえて独自の課題解決に向けた探究活動を行います。そのため、大学の教室だけでは学校現場の実践はつかみません。多摩大学の探究の指導法の授業では、現場の高校の先生に探究活動について話をしてもらったり、高校生の探究活動の様子を動画視聴したりして、学校現場の探究活動に触れる機会を設けています。また、学習ボランティアの活動を通して、実際に高校生の活動をサポートしながら探究活動の指導法を身につけていきます。教育実習では、情報や英語の授業が主な実習内容となりますが、今後教員になった際の探究活動の指導だけでなく、社会に出てからの諸課題の解決にも役立つ力を身につけることができます。多摩大学の教職課程では、このような実践的な授業を数多く展開しています。



柘刈洋美

多摩大学経営情報学部経営情報学科 准教授。早稲田大学教育学部国語国文学科卒業後、ラジオ局、広告代理店、生命保険会社の宣伝担当といった広告業界に勤務。学校法人敬心学園、新潟医療福祉大学を経て現職。博士（教育学）。日本教育工学会所属。

企業が大学生・高専生の学びを応援

JEES・住友金属鉱山地域貢献奨学金

2030年のありたい姿の一つとして「地域社会の一員として地域の発展に貢献し信頼を得る企業」を掲げる住友金属鉱山株式会社。事業所が所在する地域の持続的発展に貢献する意欲がある学生の経済的支援に加え、その意欲醸成や地域社会への参画体験などを後押しすることを目的とし、2023年に返済不要の給付型奨学金事業「JEES・住友金属鉱山地域貢献奨学金」が設立されました。



新居浜市をよりよく理解するために、奨学金が別子銅山記念館を見学している様子

JEES・住友金属鉱山地域貢献奨学金募集概要

対象	指定大学の学士課程1年次又は2年次、及び指定高等専門学校の本科第4学年に正規生として在籍し、東京都多摩地区、兵庫県、愛媛県、鹿児島県の持続的発展に貢献する意欲がある日本人学生
給付人数	年間20名
募集期限	毎年9月頃まで（在籍校での学内募集期限別途要確認）
給付額	月額10万円、年額120万円
給付期間	在籍過程修了まで

住友金属鉱山株式会社
社会貢献活動

